

ことばの 学び

三省堂 国語教育
a new way
of learning
Japanese



平成18年度版
『現代の国語』『現代の書写』
教科書特集号Ⅱ

ワンテーマ誌上交信 「思いがかたちになるとき」

あまんきみこ 姉崎一馬

特集

個に応じ、個を生かす 学習指導とは



vol. **9**

② 対話する教科書

①

教科書から
ひろがる学び

③

新しい学びの
サイクル

④

テキストから
プログラムへ



教科書を、先生方や家庭や地域など多くの方々と
対話や交流を積み重ねながら、協働してつくりあげていきたい…
三省堂『現代の国語』『現代の書写』は、そんな教科書をめざしています。

平成18年度版
『現代の国語』
『現代の書写』
教科書特集号
II

ことばの 学び

三省堂 国語教育
a new way
of learning
Japanese

vol. 9
CONTENTS

+表紙イラスト
藤川亜矢
+デザイン
石川愛子
+DTP制作
田頭ひろみ



平成18年度版
『現代の書写』

平成18年度版
『現代の国語』
(イラスト：たむらしげる)

●ワンテーマ誌上交信

「思いがたちになるとき」

あまんきみこ 姉崎一馬 …… 2

●特集

個に応じ、個を生かす 学習指導とは

パラダイム転換	高木 展郎 …… 4
漢字学習の新しいプログラム	伊坂 淳一 …… 6
ヒロシマに関連した読みの指導	水野 美鈴 …… 8
書くことの三つの要素	井手 一仁 …… 9
「学習者自らが発見する」学習へ	安部 朋世 …… 10
協働(コラボレーション)で書く	牧戸 章 …… 11
平成18年度版『現代の国語』 「話すこと・聞くこと」「書くこと」学習材の系列	…… 12
「基礎・基本と補充・発展」への 理解を深めるために	…… 14

●教室で読む 2

比べ読みの学習効果とその方法

松友 一雄 …… 16

●ちょっと気になるカタカナ語 2

「クライテリオン」「シラバス」

「ポートフォリオ」「モジュール」 …… 20

●平成18年度版『現代の国語』『現代の書写』 SNP

「ことば・ころ・いのち」直筆ポスター …… 22

●学びを開く 一北から南から 2

殿様商売

矢内 忠 …… 24

●読み語りの出前 2

「絵本の新しい楽しみ方を発見した」お母さん

後路 好章 …… 25

思いがかたちになるとき

昔、ことばは、神のものでした

告白

作品を書いているとき、わたしは懸命にラブレターを書いている気持ちになっけています。あれを思い、これを思い、ああも考え、こうも考え、足したり、消したり、また元に戻したり、そんな愚かな繰り返しをしているからでしょうか。

現実のラブレターなら、相手の迷惑を横におけば、何通、いえ何十通でも出せることでしょう。けれど作品は、たった一通しか出せないラブレター、どうもそう思われてなりません。

その一通を求めて、ときおり、夥しい文章を独りで埋葬しています。どうにも書きあげられず、失意の埋葬だけのときもあります。また、そうしているうちに、それまで思ったり考えたりしている世界が全部いっしょになったように、書きあげられることがあります。そんなときことばは無機質の記号ではなく、生きものになって勝手に動きだします。そして書き終えたとき、わたしは燃えつきた思いで、その一通をポストに入れていくのです。

昔、ことばは、神のものでした。

少女期のころ、一言主大神ひとことぬしのおおかみの話に胸をうたれました。たった一言で、この宇宙のすべて、ことの善悪のすべてを言い表す神がおられたのです。奈良の葛城一言主神社の祭神は、四世紀以前からすでに祭られていると伝え聞きました。また、使徒ヨハネは、「太初はじめにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった」と伝えていきます。

人々は、太古からことばの灵力を信じ、ことばを敬い、本質的なことばを求めつづけていたのでしょう。

それにしても、愚かなわたしは、いまだに「書いて表現する」方法を理解できていません。向こうから動きだすのをただ待つて、どきどきしながら書いたり消したりを繰り返しているというのが実情です。すきな道とはいえ、なんと忍耐強いことよと、自分に呆れ、呆れながらも、この年齢になって、ただ二通のラブレターを書きつづけているのは、やはりありがたいことだと思えるようになりました。



あまんきみこ

[あまんきみこ] 児童文学者。おもな著書に『車のいろは空のいろ』『ちいちゃんのかげおくり』『ぼんぼん山の月』『きつねのかみさま』などがある。



姉崎一馬

〔あねざきかずま〕自然写真家。山形県の朝日連峰山麓に活動の中心を置き、〔わらだやしき自然教室〕を主宰。著書に『はるにれ』（福音館書店）『姉崎一馬の自然教室』（山と溪谷社）など。

野生の樹木や自然の森林を中心に、本来の自然の姿や仕組みをできるだけわかりやすい形にして伝えたいと考え、本づくりを進めてきた。そのために写真という表現手段は欠かせない。それは写実性と正確さ、即応性といった点が生きるからである。

写真で自然を表現するとき、方向としては大きく二つに分かれる。一つはできるだけ被写体に忠実に、正確に写すこと。それは植物図鑑の資料写真という目的を掲げるとわかりやすい。図鑑は検索するための植物の特徴が正確に伝わらなくてはならない。そのためには植物分類学上の観点を確実に画面の中に盛り込む必要がある。そうした点では理性が優先され、撮影者の感情やイメージといったあいまいなものではできるだけ排除しなければならぬ。だからといってその画面が無味乾燥としたものになるかといえばそうでもない。同じ植物を撮っても撮影者の個性が画面の隅々に現れてくるからだ。

もう一方は自然の美しさや貴重さ、偉大さといった自らのイメージを前面に押し出した写真である。しかしこれらにしても、単に形が面白いから、色がきれいだから、変わっている、目立つから、だけではなにか共感できないものになってしまう。撮影者が自然の本質を理解せず、敬う心がなければそれが画面に現われてしまう。感性の根底にはその人の価値観があるからだ。

自然を撮影するとき、二つの方向は必ずしも両極にあるわけではない。図鑑であっても植物学的な正確さを少し割り引いても美的要素の割合を大きく取り入れる場合もある。造形の見事さを表現するのであっても、生物の構造力学的な存在感が美しさの源である場合も少なくない。カメラのファインダーの中でそうした両極のどちら側に観点を針を振るのか、それが自然をとらえる場合の感性というところだろうか。いずれにしても、そうした目が養われてくれば、自分の中に確立された感性の視力とでもいうものが撮るべき対象を目に飛び込ませてくれる。

感性の根底にはその人の価値観がある

個に応じ、**個**を生かす 学習指導とは

学習者一人ひとりが、確かな学力としての「基礎・基本」をどのように身につけていくのか。
また、一人ひとりの習熟度に応じた学習をどのように展開していくのか。
本号では、その可能性について考えていきます。

パラダイム転換

高木展郎

横浜国立大学

1 「パラダイム転換」 を行うことの意味

「パラダイム」ということばは、トマス・サミュエル・クーンがその著『科学革命の構造』（原著初版一九六二年、改訂版一九七〇年、邦訳一九七一年、中山茂訳みず書房発行）で、科学と科学の歴史についての見方、科学論のことを意味する概念として述べたことによる。

クーンは『科学革命の構造』の冒頭で、パラダイムを「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」と定義し、この語を自らの科学論のキーワードとした。そして、「モデル」「概念枠組み」「概念図式」などといった、科学論の歴史の中でそれまで多く使われてきたことばを用いずに、新しい概念として「パラダイム」という用語を用いた。

「パラダイム転換」とは、この概念としての「パラダイム」の枠組みの転換をいう。「パラダイム転換」を行うとは、これまで自明とされてきた概念の枠組みを根本的に問い直すことを通して、それまでの概念とは異なった概念を提示することである。

教育においても、これまで自明とされてきた固定化した概念を、新しい視点をもって問い直すことが、今日の課題である。そこに、この「パラダイム転換」ということを行う意味がある。

2 学校教育における 「パラダイム転換」

教育は文化の継承と伝承とを担っている。そのため、教育という活動は、本来的に保守的なものとなる。また、ほとんど全ての人が学校教育を受けているため、教育を語る時、それぞれの人は、自分の体験

をもとに教育を語る。これらことは教育をより身近な存在としてとらえるには機能するが、教育を狭い範囲でとらえることにもなりうる。

教育を自分の原体験の枠組みの中のみからとらえると、これまでの教育の枠組みの中に、教育を閉じこめてしまうことになる。

教育における「パラダイム転換」のためには、これまでの原体験をもとに教育をとらえるよりも、これからの時代に必要な能力や学力を措定し、そのためにどのような学校教育を行っていくか、というビジョン（展望）とミッション（使命）をもたなくてはならない。

このことは、これまでの教育に対する見方や考え方の「パラダイム転換」を図らなくては、実現しない。これまでの教育を元に、これからの時代の教育を考えていては、これまでの教育の枠組みから抜け出すことはできない。これまで自明とされてきた教育活動を再考し、これからの時代に求められる新しい学力がどのようなものであるのか、その考え方の枠組みそのものの転換を図ることが求められている。

3 国語の授業に 求められる 「パラダイム転換」

国語の授業では、これまで主たる学習材としての教科書をもとに授業が行われてきた。確かに教科書は、学習指導要領に準拠して作成されているし、検定も受け、授業の中心として用いる学習材であり、内容のバランスや配列も、優れている。

しかし、教科書の最大の弱点は、各学校の学び手の実態の全てに見合ったものではないということである。それは、一般化ということのメリットでもあり、デメリットでもある。

これまでの学校教育は、先にも述べたが、知識や技能を伝達するということにその中心があった。しかし、今日の教育の方向は、一般化ではなく、一人ひとりの学び手の個性に合う教育が求められている。そのため、学校という集団の学びの中に、個別化・個性化をどのように位置づけていくかが、問われている。

本来、学校教育は、集団の中の一人ひとりの学び手を対象としている。集団の中で、他者とかかわること、一人ひとりの学び手が尊重されているということでもあり、一人ひとりの学び手は、個として切り離された存在ではない。

したがって、授業で国語を学ぶということも、自分以外の他者とかかわりの中で、自分という存在を見つめ直すことである。他者とかかわりの中での授業は、教室

を構成する一人ひとりの学び手によって、その学びの内容が決定される。ここに集団と個とかかわりがあり、教室で学ぶことの意味がある。さらに、それぞれ教室における集団と個とかかわりの中に、それぞれの教室の特徴がある。

そのためには、各教室ごとのカリキュラム構成が求められる。初めに教科書ありきではなく、学び手の学力にあった授業構成へと、パラダイムを転換しなくてはならない。『現代の国語』は、そのことを具現する教科書構成となっている。

国語の授業に求められる「パラダイム転換」は、次の順での授業構成である。

- ① 育成すべき学力の措定（目標の設定）
- ② 目標に合わせた評価規準の決定
- ③ 評価規準を実現するための評価方法の具体化
- ④ 評価方法に沿った学習活動の組織化
- ⑤ 学習活動を具体化する学習材の選定

この①から⑤の順にしたがった授業構成が、これからの国語の授業には求められる。



〔たかぎ のぶお〕 横浜国立大学教授。主な編著書に『ことばの学びと評価―国語科授業への視角―』『ことばが育つ学びのプラン』（三省堂）『国語科教師教育の課題』（明治図書）など。

漢字学習の新しいプログラム

伊坂 淳一

千葉大学

平成18年度版
『現代の国語』
現代の漢字
教科書特集号
II

個に応じ、個を生かす
学習指導とは

国語科教科書におけるこれまでの漢字学習は、読むこと学習材を中心とする文脈の中に「新出漢字」「新出音訓」として提示しつつ、他方、そのような文脈に配当できない多数の漢字をいわゆるドリル形式に仕立てるといったのが大方の扱いであった。本稿の筆者は、本誌『ことばの学び』第7号掲載の小論「漢字学習の新しい枠組に向けて」において、前者の限界について述べたが、要点は以下の通りである。

①ある漢字を特定の読むこと学習材の特定の文脈の中で学ぶことに必然性がない。新出漢字は恣意的な配当にならざるをえない。

②国語の授業時間数減に伴う読むこと学習材の縮小により、配当できる漢字数が限

られてきた。無理に漢字配当を増やすことは、読むことの学習を圧迫する。

③弾力的で個性的なカリキュラム編成が浸透しつつある現在、新出漢字の提示の順序性に意味が失われてきた。

また、ドリル形式の漢字学習には、機械的な繰り返しに終始する危険性が伴う。仮にクイズやゲーム感覚のおもしろさを加味させることは可能であっても、はたしてそれで実際に役立つ学習になっているのかという疑問が常につきまとった。ただ「字」を覚えるだけでは、「言語」を使えることにならないのである。

前掲の小論では、新しい学習の枠組としての「漢字のグループ化によるとりたてて指導」を示唆したが、それを具体化したのが、

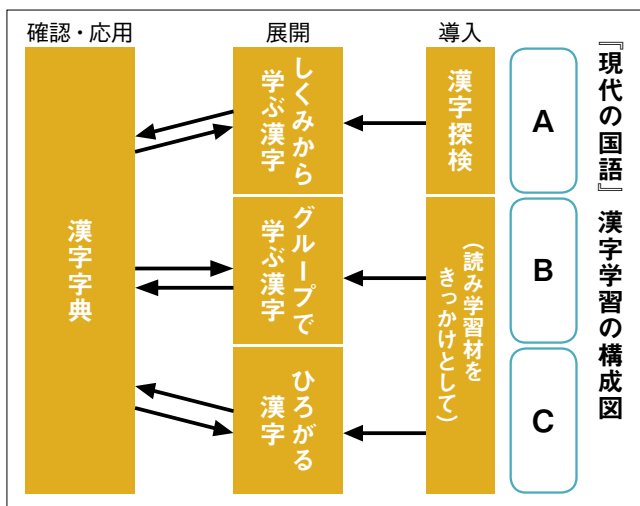
平成18年度版『現代の国語』において提案する漢字学習プログラムである。これは、各学年の学習材が、

A 「漢字探検」→「しくみから学ぶ漢字」

B 「グループで学ぶ漢字」

C 「ひろがる漢字」

から構成されるプログラムである。



Aの「漢字探検」で扱う漢字は、小学校学習漢字を中心とする既習の漢字のみである。まず、上段の一コマ漫画風図版で課題意識を喚起したい。次に、下段の「考えよ

う・話し合おう」により、しくみ（漢字や熟語の構造や機能の原理）を自分たちの試行錯誤によって「発見」することを促す学習へと進める。さらに、「しくみから学ぶ漢字」において、発見したことを知識として確認したあと、次にその原理を手がかりとして、中学校で学習する新しい漢字・音訓などの習得をめざす。「しくみ」としては、字体・画数・筆順、部首、漢字の構成、同音・同訓異字、熟語の構成、同音異義語、類義語・対義語、四字熟語などを三学年に配置している。

Bの「グループで学ぶ漢字」は、文字どおり漢字や熟語を、「自然」「動作」「スポーツ」「人間関係」などにグループ化し、意味の関連性や連想によって習得していくことをめざすものである。

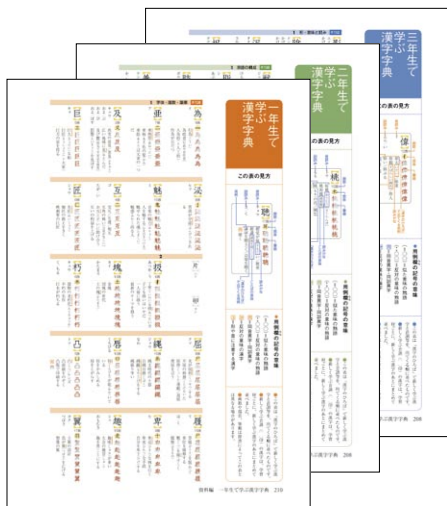
Cの「ひろがる漢字」は、読むこと学習材に出てきた漢字を、日常的な文脈に沿った用例の中で定着を図ったり、限定された位相にのみ現れる漢字や熟語を集約的に取り上げたりして、さまざまな形で漢字力の補強を意図している。

A・B・Cともに、漢字や熟語を孤立的に扱うのではなく、中学生として身につけてほしい言い回しや表現、日常生活で頻繁に接する表現、国語や他教科、総合的な学習の時間などの学習に役立つ表現として短

文の中に配し、漢字学習を語彙や表現の学習に広げることには配慮している。

なお、資料編の「漢字字典」は、画数・部首・音訓・筆順だけでなく、補充的な熟語例や短文例、同音異義語など豊富な情報とともに学習材順にあげ、学習者自身で学習を進めていけるような効果的な資料となっている。

漢字学習は、このような新しいプログラムにより、学習法や年間学習指導計画での配置でも、より柔軟な取り組みが可能となった。さらに、読むこと学習材の重要な漢字は、その都度くり返し押さえておきたい、多様な音訓や熟語・表現も身につけさせ、漢字の書きにも直結させたい場合に対応して、学習指導書、生徒用漢字ワークブックなどで十分なサポートを用意している。



「漢字字典」
確認と主体的な学習を支援する。



【いさか じゅんいち】
千葉大学教授。言語事項の既成概念、伝統的な学習内容・学習方法を、あえて国語学プロパーの立場から変革することを目指している。著書に『ここから始まる日本語学』（ひつじ書房）など。



2年「グループで学ぶ漢字」
意味によるグループ化で、語彙の拡充に役立つ。



1年「漢字探検」
既習の漢字を用い、漢字のしくみについて考え、自ら「発見」していく。



1年「しくみから学ぶ漢字」
「漢字探検」での気づきや発見をもとに中学漢字のしくみについての学びが展開され、スムーズに理解が深められる。

ヒロシマに関連した読みの指導

一 心も育てる学習材を

今年の夏で戦後六十年になる。平和が続いた日本で生まれ育った生徒たちにとり、戦争は遠いものになっている。東京大空襲も広島・長崎への原爆投下も戦中の人々の窮乏生活も生徒たちからは縁遠い。世界の平和が揺らいでいる今、読みの力もつけながら「戦争と平和」について深く考え、心も育てられる学習材が求められる。戦争の悲惨さや、未来ある命や平和な生活などかけがえないものを奪われたひとびとの悲しみを伝える学習材がほしい。

『現代の国語』二年生の新学習材に「壁に残された伝言」が掲載された。これは、広島市立袋町小学校のコンクリート校舎の壁

水野美鈴

羽村市立羽村第二中学校



【みずのみず】羽村市立羽村第二中学校教諭。2004年、『“ヒロシマ”に関連した二つの学習』で読売教育賞国語科部門最優秀賞受賞。

平成18年度版
『現代の国語』
現代の国語
教科書特集号
II

個に応じ、個を生かす
学習指導とは

二 朗読劇へ

の下に残された「被爆の伝言」について書かれた説明文である。前半は、奇跡的に伝言が発見され、壁の下の文字がこれまた奇跡的に保存されていた事情が謎解きの形で描かれる。後半は、「被爆の伝言」が「あの日」の広島を語る遺産であり、証人であり、見る人々の心を無限に揺さぶり続けることを述べている。この学習材は、謎解き型の説明文として内容理解の上でも興味をもって読めると同時に、広島市の被爆時の混乱や家族・知人に何とか連絡を取ろうとした人々の心情をも考えさせることができる。また、読者の興味を引きつけながら事柄を客観的に説明する表現方法を学び、自分の表現に生かす学習材としても有効だ。

読みの基礎としてこの学習材を扱う際は、前半は文字が残されたいきさつを表現にそって読み取り、後半は、壁に残された伝言が見る人々の心を動かす理由や筆者の思いを考えさせるのがよいだろう。

読みの発展としては、原爆体験記をもとに班学習で朗読劇をつくる方法を提案したい。「壁に残された伝言」には、「あの日」の広島は悲惨な書かれていない。被爆の惨状を一度自分の中に取り込み、消化して表現する方法として朗読劇は有効である。『原爆体験記』（朝日選書）には、二十九人の

体験が載っている。この文章の中から印象的な部分を「その日の朝」「爆発の瞬間」「惨状」「死」「原爆への思い・これから」に分けて綴り合わせ、そこに原爆の詩歌などを入れ込んで二十分程度の作品にまとめ、上演させる。こうした基礎・基本、発展の学習を組むことによって文章を正確に読み取る力をつけるとともに体験記などの文学的な文章を多数読み、その内容を自分の体と心を通して表現しようとする気持ちを持たせることができる。「読むこと」の技能面だけではなく心も耕す学習ができると考える。



2年「壁に残された伝言」

奇跡的に保存された発見された壁の下の伝言。そのいきさつをめぐる謎解き型の説明文として読みの力もつけながら、「あの日」を伝える証人として今も人々の心を動かす伝言を通して「戦争と平和」について考え、心も育てられる。

書くことの 三つの要素

一 気力・体力・戦術

目標の達成には、「気力・体力・戦術」の三つの要素が必須である。部活動でも、相手よりも気力にまさり、体力が鍛えられ、戦い方をまちがえなければ、まず負けることはない。

「書く力」の向上を目標にした場合、「気力」とは、「書くこと」に向かう意欲になる。「書くこと」は、自分の思いや考えを他者に伝えようとする能動的な行為である。まず初めに、この他者との通じ合いへの気力が充実しなければ、「書く」行為は成立しない。次に、いくら伝えたい思いや考えがあっても、十分な基礎体力が備わっていないならば、意思の疎通は図れない。書くこととする

対象に対する知識や内容の豊かさが求められる。

そして、三つ目の「伝え方」(戦術)では、自分の思いをわかりやすく説得性をもたせて書くための技術の鍛え方が問題になる。

二 自問自答する力

個人の思いや考えは、個の内面において自問自答をくり返しながら構築されていくものであり、「書く」行為は、ことばによってそれを綴ることで定着させることである。自己の思考が他者にうまく伝わったかという「書く」行為の結果も含めて内省していく力が「書くこと」を支える基礎・基本である。したがって、「書く」目的と対象を明確にすることによって意欲を喚起し、「書く」内容を充実させる思考の訓練によって、論理的に書き進めていく方法を意識化させていきたい。特に、「書く」行為すべての過程で、自己を対象化していく力Ⅱ自問自答する力を鍛えていくことが求められる。

「書くこと」の授業では、先の三つの要素を相乗的に高めていく指導の工夫が大切である。

三 実の場

「書く力」は実際に「書く」実の場でしか鍛えられない。さまざまな方法・場面を用

意して、自問自答が豊かに展開されるように実の場を構成していく必要がある。

『現代の国語』は、自己の体験を伝える学習材(一年生「体験文を書こう」)から主張をまとめる学習材(三年生「主張文を書こう」)まで、段階に応じた「書く」活動が設定されており、テーマ設定や取材方法についても、カード法や討論法などを自由に組み合わせることができるよう構成されている。さまざまな学びの場において、「自問自答」の経験を蓄積させながら、「書くこと」への気力を持続させ、「書くこと」への体力を高め、技術の習熟を図っていくたい。

1年「体験文を書こう」

自分が発見したことなどを体験文として書くことは、思いや考えを伝え合うとともに、自分自身を見つめ直すことになり、思いや考えを深め、確かにする。

井手一仁

愛媛大学教育学部附属中学校



【いで かずひと】愛媛大学大学院教育学研究科修了。内省力・自問自答する力・メタ認知をキーワードにことばの力の育ちを見直していきたいと考えている。

「学習者自らが 発見する」学習へ

一 暗記型学習からの脱却

「言語事項」の学習の中でも、文法の学習は、「暗記のための暗記」型の学習に陥りがちな学習の一つであろう。それは、学習対象である日本語が、ほとんどの学習者にとっての母語であるため、「自由に操っている日本語の規則をなぜ今さら覚えこむ必要があるのか」という疑問を生じさせ、学習に対する強い動機を得にくいことによるものと考えられる。

暗記型の学習から脱却し、文法学習を意味のあるものにするためには、学習者自らが興味関心をもってテーマに取り組み、ことばのきまりやはたらきについて発見する学習への転換を図る必要がある。従来の「知

安部朋世

千葉大学

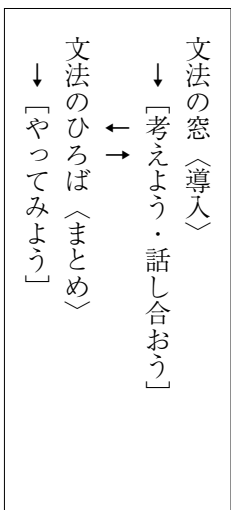


〔あべともよ〕千葉大学教育学部助教授。専門は日本語学。日本語文法に関する研究を行うとともに、国語科における言語事項の教育にも関心を持ち、研究を行っている。

識の習得と課題による確認」という「課題で終わる」学習から、「課題に取り組むことにより学習者自らが発見する」という「課題から始まる」学習への転換である。

二 発見型学習の実際

『現代の国語』における文法の学習材は、一つのテーマの学習が「文法の窓」と「文法のひろば」に分かれ、両方がリンクするかたちで次のように構成されている。



この構成で特徴的なのは「文法の窓」である。「文法の窓」から学習を進めることより、学習者の興味関心を喚起し、学習者が積極的に課題に取り組み互いに話し合うことによって、「自らのことばで説明し発見していく」学習となるからである。

例えば、「文法のひろば」三年「助詞・助動詞」へとリンクする「文法の窓」では、
猫「ねずみ」「追いかけて」。

の空欄に入る助詞・助動詞を複数の候補の中から探し、いろいろな文をつくるという課題が設定されている。(導入)における

この課題は母語話者ならば新たな知識を必要とせず取り組めるが、空欄に入る候補が一通りではないことから、「猫がねずみを追いかけた」「猫よねずみを追いかけて」などさまざまな文が提示されることが予想される。そこから、例えば「猫」と「追いかけて」で後接する語の違いに特徴はあるかなど、さまざまな気づきや発見が可能となる。また、次の(まとめ)において自分たちが実際につくった例文で学習内容を整理確認することによって、「文法のひろば」が「単なる知識の習得」ではなく、「自分たちが発見したことを確認する」位置づけとなる。さらに、課題におけるさまざまな発見は、「文の成分」や「語順」などの関連するテーマに発展する可能性をもつ。

学習者が実際にどのような発見をするかを確かめながら、よりよい学習材を開発し続けることが、学習者の言語能力育成に寄与することになると考える。



協働(コラボレーション)で書く

「新しい「書くこと」の学びへ

一 協働(コラボレーション)

学校・教室における「書くこと」の学習指導の課題はどこにあるのだろうか。書くことのテーマについては、課題を与えても自由であつても、まずは、学習者が実際に「書く」という行為を経なければ「書くこと」の能力は獲得されないということは確かである。

ただし、学校・教室で書くという行為は、どのように目的意識・相手意識・修辞意識をもたせようと、先生が見る・チェックする(＝評価する)という「壁」を越える必要がある。学習者にとっても「書くこと」という言語活動の成果が、常にチェックされる通過儀礼のみであつては、ほんとうの

牧戸 章

滋賀大学



〔まきどあきら〕 滋賀大学教育学部教員。「ことばの学び」の生成にかかわって、私秘性・関係性・互恵性・歓待性などの視点から考案している。

書きことばの獲得にはなっていないかという。教室には書く仲間＝クラスメートがいる。文章を書くという共通の目的をもった仲間である。「書くこと」のプロセスのさまざまな段階で交流してアドバイスし合うという学習活動を仕組めないであろうか。

○発想・着想段階(何を書こうかを思いめぐらせながら決めていく)

○構想段階(どのような順序や構成で書くかと準備する)

○下書き段階(おおよそ書いてみた)

○推敲段階(当初に想定していた思いや文章と書いてみた実際の文章とを比べながら検討・修正する)

○書き上げた段階(ひとまずひとまとまりの文章を書いた)

以上のような書く活動のプロセス(過程)のさまざまな段階で交流する場面が組織されて良いはずである。

二 コラボレーションの方法

私の実践研究校で、少人数のグループで付箋紙を使いながら協働(コラボレーション)で書く学習指導を試みている。この指導法は、小学校四年生の後半から高等学校二年生ぐらいまでに有効なものであると考えられる。自己表現という共通の目的がもてたとき、私たちの予想を超えて、表記上

の細かな指摘をする学習者は皆無であつたし、学習者同士が新たな人間関係を形成していく姿を見て取ることもできた。

本来、「書くこと」の学習指導は、自立したひとりの書き手を育てることにある。この協働(コラボレーション)で「書くこと」の学習場面では、いろいろな意見・質問・アドバイスを受けるものの、それを取り上げるかどうかは、書き手の判断と責任である。自然な流れで、そのような能力を育てることができると考えられる。

そうすれば、指導者は、必要に応じた個の指導に時間を割くことができ、「書くこと」における「伝え合う(受けとめ合う)」世界を教室内に実現できるはずである。

意見文を書こう

① 意見文を書く

② 下書きをする

③ 推敲する

④ 発表する

この意見文を書く目的は、自分の考えを相手に伝えることです。自分の考えを伝えるためには、自分の考えを整理し、相手にわかりやすく伝えることが大切です。

① 意見文を書く

② 下書きをする

③ 推敲する

④ 発表する

⑤ 発表する

⑥ 発表する

⑦ 発表する

⑧ 発表する

⑨ 発表する

⑩ 発表する

⑪ 発表する

⑫ 発表する

⑬ 発表する

⑭ 発表する

⑮ 発表する

⑯ 発表する

⑰ 発表する

⑱ 発表する

⑲ 発表する

⑳ 発表する

㉑ 発表する

㉒ 発表する

㉓ 発表する

㉔ 発表する

㉕ 発表する

㉖ 発表する

㉗ 発表する

㉘ 発表する

㉙ 発表する

㉚ 発表する

㉛ 発表する

㉜ 発表する

㉝ 発表する

㉞ 発表する

㉟ 発表する

㊱ 発表する

㊲ 発表する

㊳ 発表する

㊴ 発表する

㊵ 発表する

㊶ 発表する

㊷ 発表する

㊸ 発表する

㊹ 発表する

㊺ 発表する

㊻ 発表する

㊼ 発表する

㊽ 発表する

㊾ 発表する

㊿ 発表する

2年「意見文を書こう」
テーマを決める段階、下書き段階、書き上げたあとの段階など、書く活動のさまざまな段階で交流が設けられていて、教室で書くことの利点を生かした「協働(コラボレーション)で書く」が実践できる。

「話すこと・聞くこと」 「書くこと」 学習材の系列

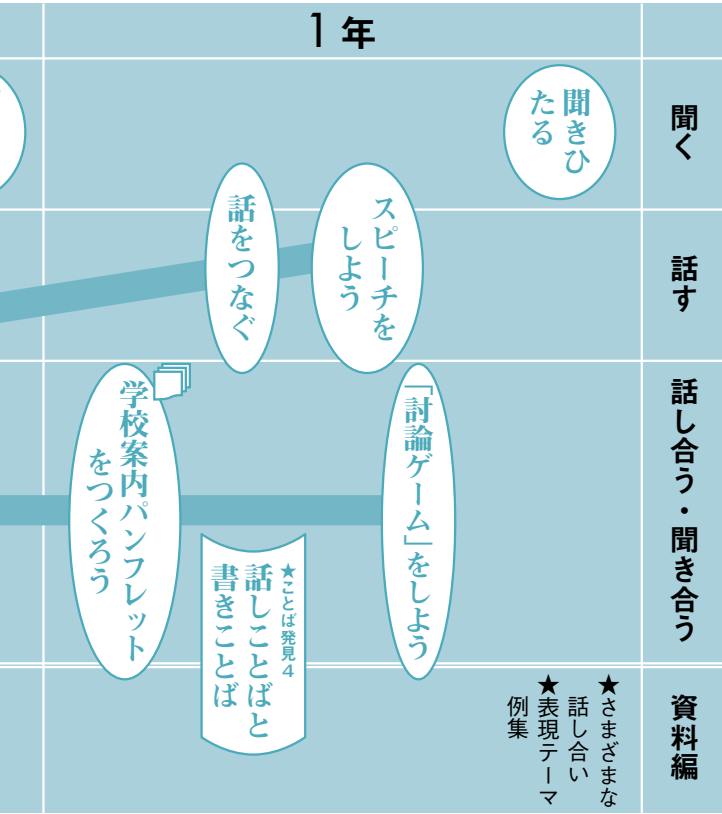
平成18年度版
『現代の国語』
現代の国語
教科書特集号
II

個に応じ、個を生かす
学習指導とは

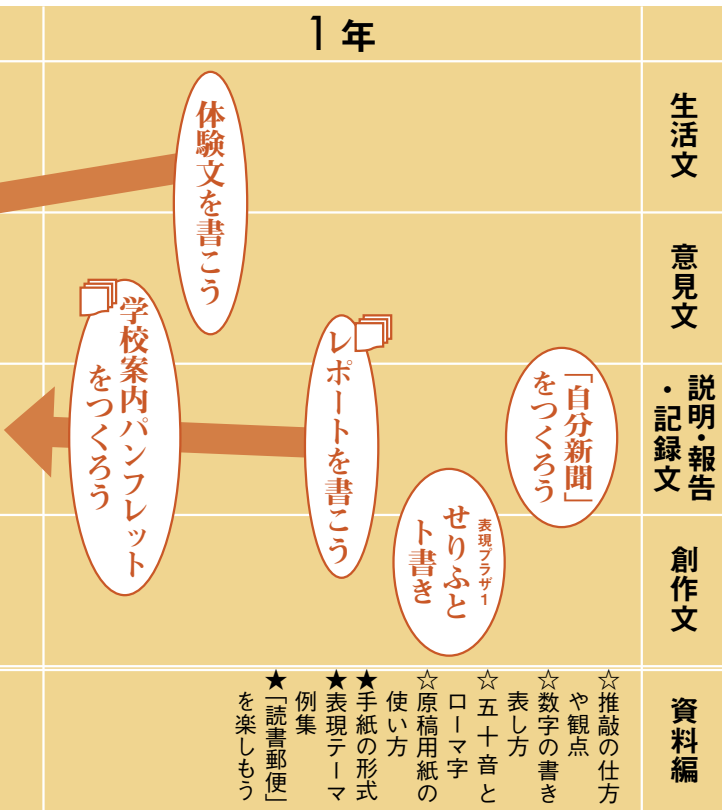
『現代の国語』は、学習材の採録にあたり、作品の価値を大事にしながら、どのようなことばの力(言語能力)をつけるのか、という観点を重視しています。

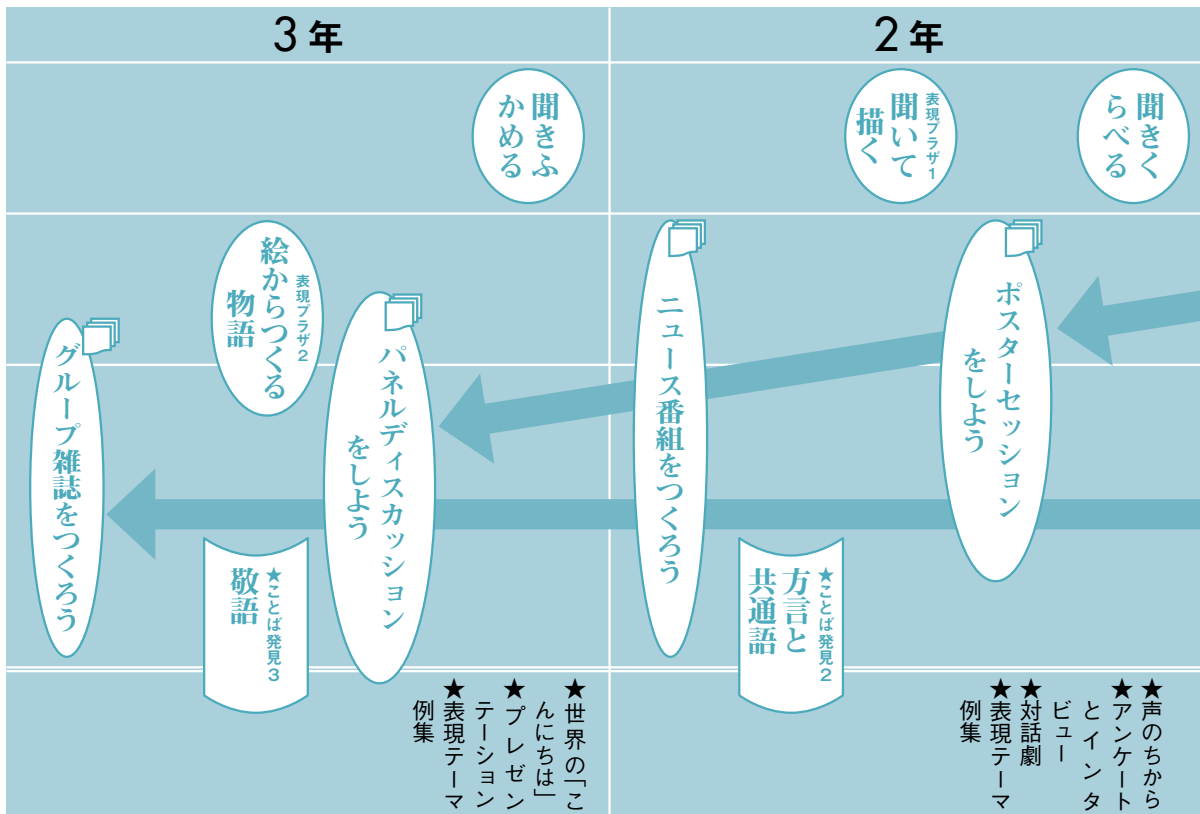
「話すこと・聞くこと」の学びでは、「聞くこと」の学習の位置づけ「課題発見性・目的性の重視」「多様な活動経験」、「書くこと」の学びでは、「書くこと」の日常化」「本当の体験」の獲得」「プロセスの重視」という点に特に配慮しました。

「話すこと・聞くこと」

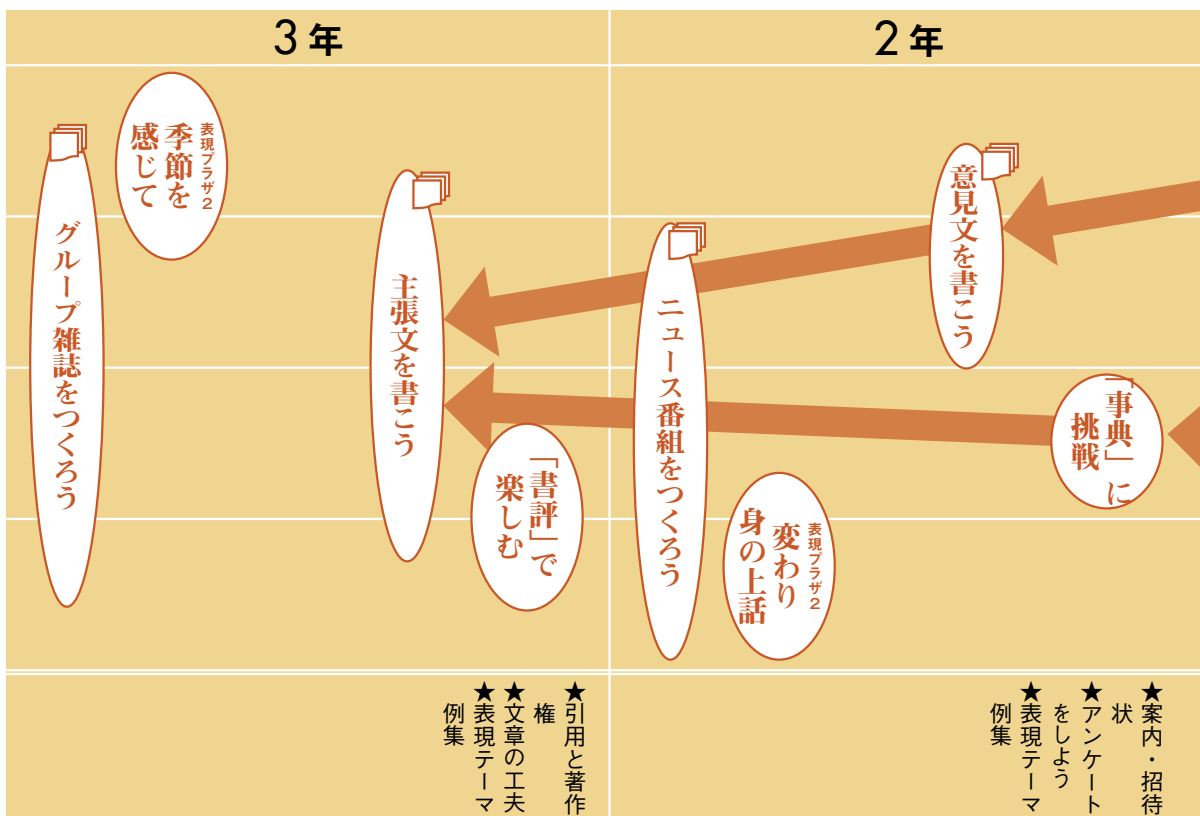


「書くこと」





→調べ学習を含む学習材



→調べ学習を含む学習材

深めるために

Ⓐ＝基礎的な理論を学びたいときに
Ⓑ＝広く関連情報を得たいときに
Ⓒ＝指導改善のヒントがほしいときに
*定価は2005年3月現在のもの(税込)です。

『現代の国語』編集委員会



佐伯胖
『現代教育 101 選 7
考えることの教育』
(国土新書 1,680円 1990年)



新井郁男編
『読本シリーズ No.147
子どもの学力読本』
(教育開発研究所 2,100円 2001年)

考えさせる授業の構想に 目を開かせる

Ⓐ Ⓒ

ここが魅力

考えることに関する指導の進め方、わかるということ、学びの基礎に関して、一読することによって手にできます。

内容紹介

私たちは、日ごろ漠然と、思考に関する学習活動を授業で大切にしないでと考えています。指導にあたって、「よく考えてごらん」「しっかり考えるといい答えが見つかるよ」などと生徒に声をかけています。しかし、思考力育成を厳密にとらえて指導に位置づけるまでには、いたっていないのではないのでしょうか。

本書では、思考力をわかること、学びの基礎と関連付けてとらえ、内容を展開させています。そして、随所ではっとさせる指摘がなされています。「私たちが子どもの『考え』をすべて一種の『技能』と考える場合、教育というものはどうしても『ヤラセの術』になり、飼育の術になる。『考えさせる』『問いに答えさせる』『解かせる』『身につけさせる』などなど。そのことはまた、同時に、『型ハメ』教育を意味する。」

こうした、本質を突いた記述は、学びの基本を大切に授業、個に応じる多様な指導の計画に貴重な示唆を与えてくれます。指導の展開においてどのような点に配慮すべきか、子どもの主体的な学びを育てる指導の創意工夫のあり方に関して手がかりを与えてくれます。

学力向上への 明快なストラテジー

Ⓑ Ⓒ

ここが魅力

学力形成の基盤にはどのようなことがあるか、基礎・基本、発展的な学びをどうとらえればよいか、コンパクトな形で理解を与えてくれます。

内容紹介

学力の基本的な理解、学力をつけるための効果的な方法が明らかになります。「基礎基本と学力」「自ら学ぶ意欲と学力」「教材と学力」「個別指導と学力」といった項目が、すべて4ページ程度で記述されていますので、とにかく読みやすい、わかりやすい。授業改善の工夫のとりえ方が広がり、奥行きが出るに違いありません。

全体は次のように構成されています。

- 1章 学力とは何か
- 2章 学力の実態
- 3章 学力形成の基盤
- 4章 学力向上へのストラテジー

例えば、あるテーマで実践研究に取り組むことになった、授業を公開しなくてはならない、といった難題に直面するとします。何を実践の中心に据え、学力保障をどう位置づけるか、手がかりに悩むといったときに、この本から明快な解答を得ることが期待できます。

情報機器の活用、TTの生かし方、効果的な学習集団の組織のあり方などにもふれられていて、指導改善のヒントが得られることも、本書の魅力となっています。

平成18年度版
『現代の国語』
現代の国語
教科書特集号
II

個に応じ、
個を生かす
学習指導とは

「基礎・基本と補充・発展」への理解を

参考図書のご紹介



加藤幸次
『ピンポイント新教育課程実践 No.6
発展的指導・補充的指導
50のポイント』
(教育開発研究所 2,500円 2003年)



文部省
『中学校国語指導資料第二集
言語事項の学習指導』
(東洋館出版社 現在品切れ中)

発展的指導の 基礎的事項の明確化

② ③

ここが魅力

理論と実践方略とを短時間のうちに得ることができます。基礎的な内容を重視する指導、発展的な指導の改善に取り組む際の、ハンドブックの役割を果たしてくれます。

内容紹介

「はじめに」では「最も重要な工夫は指導方法にある。個に応じたきめ細かな指導は、まさに教師の指導方法の工夫に大きく依存している」と述べられています。本書を貫くのは、「発展的・補充的な学習指導の課題をどうとらえ、教師の指導方法をどう改善するか」という問いかけです。

この課題意識のもと、本書では各教科等の発展的・補充的指導のプランと指導技術とが示されます。

発展的指導の例として、習熟度別指導、複線型教材の活用、オープンエンド型の授業、マーケティング・ディスカッション法、ジグソー学習などの紹介もあり、子ども相互が触発しあう学習活動の例なども盛り込まれていて、それが新しい指導構想の手がかりになるものと思われます。

それぞれの項目には「取り組みのポイント」が示されていますので、日々忙しい時間を過ごしておられる先生方にとっては、その点でも便利だと思えます。全体を通じ、日々の指導改善に悩む先生方の立場に立って記述されていますので、読者の先生方にとって生きた手引書になるでしょう。

国語科の指導の 基礎的事項の明確化

① ③

ここが魅力

13ページからなる第一章で基本的な考え方が明示されます。あと200ページ余はすべて言語事項のわかりやすい解説。まさに国語の基礎学習のテキストブックです。

内容紹介

基礎的・基本的な内容を大切に学習指導の工夫に、貴重な示唆を与えてくれる本です。何を基本的な内容としておさえ、発展的な指導ではどういうことを扱えばよいか、基礎的事項を重視する指導の改善に関するヒントがここにあります。

本書の中心となる部分は、次のように構成されています。

- 第2章 語句
- 第3章 語彙
- 第4章 文法的事項
- 第5章 指導計画の作成等

そして、例えば「語句」について見ると、語句とその組み立て、語句の辞書の意味と文脈上の意味、慣用句・類義語、語句と漢字、というように、そのすべてがわかりやすく記述されているのです。

一読すれば、基本的なことをおさえるとはどういうことをいうのか、発展的な学習としてはどういうことを扱えばよいか、把握されます。そのことによって、書くことの指導、読むことの指導を変えることが期待できると思います。

1 説明文・論説文との 主体的なかわり

「比べる」ということは、何かの特徴をとらえるために最も簡単に効果的な認識の方法である。

私には仏像を好む友人がいて、折にふれて、仏像を見に行くことに引っぱり出される。私自身はその美しさや技巧のすばらしさは全くわからないのだが、何体もの仏像を続けて見ていくうちに、「さっきのよりも顔立ちがきれいだ」とか「さっきのと彫り方が違う」といったことに気づく。私のそういった気づきを待っていたかのように、友人はその違いが意味するところを解説し始める。

全く素人の私でも、こうして何体もの仏像を見ていくうちに気づくところがあり、それが意味するところを学ぶことによつて鑑賞眼のようなものが養われていくように思う。

多くのもの実際にふれ、その特徴を自らの目で発見する。そして、その発見に興味を与えてくれる人が存在することで、効果的な学習が成立する。当初私は、仏像には全く興味がなく、単なるつきあ

い程度にしか考えていなかった。だから、友人が得意げに知識をひけらかし解説を始めたら、きつと嫌になつてしまつただろう。

多くの学習者にとつて、論説文はきつと仏像と同じようなもので、興味をもつ対象とは言い難い面もある。そういった学習者に、論説文のもつさまざまな特徴をとらえる目を養おうとした場合、未熟でも主体的に学習材とかわり、なんらかの「気づき」をもつことが学習の出発点となつてくると考えられる。

2 気づきから 出発する学習

実際に、中学生に論説文学習材を比べ読みさせ、その気づきをあげさせると、明確な形ではないが、なかなかの射たものが多くみられる。基本的には、二つの学習材を読み比べるわけだから、共通性と差異性に目が向いている。それがどういう意味をもつのかということについては、十分にことばにはできないけれども、そこから学習が出発できる可能性がある。

教室で
読む②



比べ読みの 学習効果とその方法

説明文・論説文学習材の授業づくり

松友一雄 福井大学

また、学習者によつて多様な気づきが生み出されているので、話し合いによつて学習課題を設定していけば、より学習者にとって実感のある課題が設定できるであろう。

そして何よりも注目したいのが、どちらが好きだとか、どちらの方が読みやすいとかいった、個人的な読みが教室に出



【まつとも かずお】国語学力の形成過程や定着のあり様を明らかにすることで、より効果的な国語学習を模索している。また教員研修のe-ラーニング化、対話型授業支援システムの開発を進めている。(URL : <http://www.lesis-k.com>)

説明文・論説文学習材の比べ読みで何が読み取れるか

テーマが共通する学習材	同じジャンルの学習材	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマに対する書き手の立場・認識 ・書き手の考える道筋
	異なるジャンルの学習材	<ul style="list-style-type: none"> ・対比や例示などの効果 ・文章構成や論の展開
テーマが異なる学習材	同じジャンルの学習材	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンルの違いが生む表現方法の効果
		<ul style="list-style-type: none"> ・書き手の考えや思いをどのようなことばで表現しているか ・テーマのつながりや共通性 ・共通する論理構造

されてくる機会をつくり出し出していることである。

いうまでもなく、中学校の論説文学習材はその領域の専門家が書き表したもので、知識や経験において圧倒的に少ない中学生は、学習材に対して受動的な姿勢

を取らざるを得ない。

これに対して、テーマの似た複数の論説文学習材を読み比べることは、それぞれの専門家の意見が、唯一絶対の正しい考えとしてではなく、さまざまな考え方の中の一つとして学習者にとらえられるため、学習材との主体的な関係が結びやすくなる。

3 比べ読みによる学習効果

「比べ読み」の学習効果としてまず第一にあげられるのが、それぞれの学習材を客観的な視点で眺めることができるため、学習者の目が「書き手」に及ぶようになることである。

すなわち、書き手の立場・認識や表現方法の特徴などを、単一学習材での学習より比較的容易に読み取ることができるのである。説明文・論説文の比べ読みによってなにが読み取れるのか、を例示したのが上の表である。

書き手の立場・認識や意図は、単一学習材を用いた場合には、学習者自身の考えとの相対化によって導き出すこととなるため、学習者になじみの薄いテーマで

あった場合には困難なこともある。

また、表現方法の特徴については、仮に主張や意見が、それぞれの文章で同じでも、例えばあげられている例が異なることで、例示の効果と方法などを学習することができると。さらに、「書き手」の目をもってその表現方法に迫ることになるため、「意見文を書く力」へと学習内容が転化する可能性が高まる。

『現代の国語』では、こういった学習をより効果的にすすめるために、資料編に比べ読みのための学習材を数多く掲載している。

〔現代の国語〕比べ読みの学習材例

(上が本編、下が資料編)

1年

「ユニバーサルな心を目指して」

↓「この小さな地球の上で」

「トロッコ」↓「注文の多い料理店」

2年

「ホタルの里づくり」

↓「センス・オブ・ワンダー」

「壁に残された伝言」

↓「わたしが一番きれいだったとき」

3年

「平和を築く」↓「凧になったお母さん」

「松と杉」↓「生物の多様性と環境」

4 「書き手」に着目する ための比べ読み

―「壁に残された伝言」(中二)

書き手の立場に誘う必要性

二年生用のこの学習材は、広島袋町小学校の黒板に残された伝言の痕跡を調査する経緯とともに、現代の私たちが、この戦争の遺産をどう受け継いでいけばよいのかということを問いかける内容となっている。

この学習材を学習するにあたり、学習者が「書き手」と同様に「現代に生きる者」であり、こうした「戦争の遺産を受け継いでいくべき者」であるという認識が必要となる。

例えば次に掲げる「わたしが一番きれいだったとき」と比べ読みすることで、書き手の立場をより鮮明に読み取ることができるはずである。

「わたしが一番きれいだったとき」との比べ読み

資料編に掲載してあるこの詩との「比べ読み」は「学びの道しるべ」(学習の手引き)にも提示している学習方法であるが、まずは学習材分析として指導者自身が読み比べてみてほしい。

この二つの学習材を読み比べて、まず学習者が目を向けるのはなんであろうか。

等しく戦争というテーマを扱いながらも、一方は戦争を知らない書き手がその遺産をどのように受け継ぐのかというメッセージを投げかけ、一方は戦争を生きた者がその戦争体験を自らの強さをもって昇華し、新たな一步を踏み出す決意を表明している。

おそらく学習者は、こういった明確な発見に至るのではなく、もっと感覚的な違和感を発見していくに違いない。しかしそういった「気づき」を出発点にしなから、

- ① 「書き手」の立場の違い
 - ② ジャンルの違いによる表現行為の違い (主張と表明)
- などに学習を深めていくことが可能となるだろう。

本学習材の目標として提示している「事柄を客観的に説明する方法」を学ぶためには、この学習材が「客観的に」書かれていることに学習者自身が「気づく」ことを出発点にしなければならない。

学習者の程度に応じて、導入の段階で「比べ読み」を行うことも、まとめや発展の段階で行うことも考えられるが、学習者自身が学習材を客観的にとらえることを促す学習方法であるといえる。

「壁に残された伝言」と「わたしが一番きれいだったとき」(2年) 比べ読みによって、それぞれの書き手の立場や表現の特徴をより鮮明に読み取ることができる。

The image displays two pages from a textbook. The top page, titled 'わたしが一番きれいだったとき' (When I was the cleanest), features a poem and a small photograph of a child. The bottom page, titled '壁に残された伝言' (Message Left on the Wall), contains a historical document and a photograph of a wall with writing. The pages are presented side-by-side to facilitate a comparative reading exercise.

5 「論理」に着目する ための比べ読み

—「松と杉」(中3)

「論理」に着目する必要性

「比べ読み」の学習効果としては、「学習材の書かれ方」(論説文では論理構造)に目を向けさせる効果も考えられる。

論理的な文章を「読む力」はついていても、「書く力」はなかなかつかない、という声をよく耳にする。このことは、「読み手」として、より深い理解を目指して学習材の「論理」に向き合う学習にとどまらず、「書き手」として、自らの表現のモデルとして学習材の「論理」に向き合う学習が必要であることを示している。

この学習材で、松と杉の対比によって論が展開されていること、杉を例にあげながら、日本の森林の環境保全の問題に一般化して自分の考えを述べているところなどに目を向けさせ、「学習材の書かれ方」を学習させたい。

「生物の多様性と環境」 との比べ読み

「松と杉」とこの学習材とを比べて読んでみると、書き手の自然環境に対する立場や考え方の違いが浮かび上がってくる。そういった気づきを拾い上げて学習として深めていく必要性は先に述べたとおりである。

しかし、それ以上に、この二つは論説文という同じジャンルの学習材であるところから、やはり論理の展開の違いに目を向けさせていく学習を構想したい。

「生物の多様性と環境」では、「トキの絶滅」を出発点として、「ゴリラ、パンダ、メダカ」など絶滅危惧種の例があげられているが、「例と意見」の関係は明瞭で読み取りやすい。これに対して、「松と杉」の方は、かなりの分量で「松」と「杉」との対比が例示されており、「例示と意見」との関係が一見、見えにくい構造になっている。

学習材を通り一遍に読むだけでは、「松⇨杉↓日本の森林環境」という構造は見出しにくい。そこで、論理構造が見出しやすい「生物の—」と比べ読みし、この学習材の論理構造を読み解いていく足場にするのである。

また、「例—意見」の分量に目を向けてみると、「松と杉」は詳細な例示によってかなりの分量を割いているのに対して、

「生物の—」は簡潔な例示で意見自体の展開に重点を置いている。どちらがわかりやすいかといったような学習者の気づきを出発点にして、こういった点に目を向けることによって、「書き手」の立場から対比や例示といった論理に目を向ける学習を展開することが可能となる。

「松と杉」と「生物の多様性と環境」(3年)同じジャンルの学習材どうしの比べ読みで、一方の論理構造をヒントにしなが、もう一方を読み解いていくことができる。



シラバス

syllabus [英] 指導計画

シラバスを辞書などで引くと「講義などの要旨や学期間の教授細目」とあり、従来、学校では指導者のための「覚え書き」的な色あいが強かった。しかし、最近では「見通しのある学習計画」という意味で使われはじめている。これは、学習者に対する明確な指標の開示と保護者に対するアカウンタビリティの確保としてのシラバスへと変化してきているということであろう。

シラバスを作成することにより、指導者は、教科指導の目標と方法、評価規準に対しての意識や枠組みの考え方に変容をきたし、結果的に自分自身の指導方法の創意工夫・改善の方向がつかみやすくなる。作成のための話し合いの中で、授業の進め方や指導内容、評価についての議論が発生しやすくなるからである。

また、学習者にとっては「何を、いつまでに、どのように、何のために学習するのか」といったねらいや見通しをもって、効果的に学習を進めることができるため、授業におけるモチベーションを高めることにもなる。さらに、「ゴールイメージをどこにおいて学習していけばよいか」が明確になることにより、学習者自らが将来の進路目標達成や自己実現のために、意欲的、主体的に学習を行うことにつながる。

もっと知りたいときは…

神奈川県立総合教育センター
[高等学校シラバスの作成]

<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/karisen/syllabus>

カタカナ語

2

モジュールとは、辞書によれば「(建築など) 構造物の設計や形成の基準となる(最小の)構成単位」や「(コンピュータ分野で) 他のもとと交換可能なある機能を有する部品」という意味である。近年、この用語が学校教育において「1単位時間やそれをさらに分割した授業時間」という意味に転用されるようになった。

学校にモジュール・システムを導入することで、カリキュラムを単位モジュールによって構成し、より柔軟な教育課程を編成することが可能になる。現行の授業時間単位は、小・中学校では45分、50分であるが、これらの単位時間を2分割、3分割して、15～25分程度のモジュールにする。そして、これを組み合わせることにより、30～100分の授業を生み出し、時間割編成も柔軟にすることができる。これは授業時数の確保や行事などへの対応として、きわめて有効である。また、カリキュラムがモジュール化されることにより、その組み合わせは多様に想定され、さまざまな視点からのカリキュラム開発が実現する。このことは固定化されたカリキュラムの枠組みを超え、学習者の主体的な選択の幅を広げ、特色ある学校づくりや指導者の授業への創意・工夫・改善を啓発することにもなるだろう。

もっと知りたいときは…

安彦忠彦／編著
[特色ある学校づくりのための新しいカリキュラム開発 第1巻]
2004年 ぎょうせい

モジュール

module [英] 寸法や機能の単位 構成要素 (転じて学習時間の単位)

クライテリオン

criterion [英] 規範・判定基準

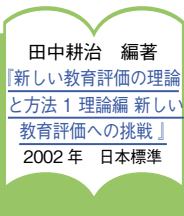
クライテリオンは、一般に「判断、評価のための基準または判断条件」とされ、絶対評価の評価尺度のひとつである。

通常、絶対評価の評価尺度は、次の二つに分類できる。一つは、クライテリオン準拠評価（平均値に意味があるような、量的変量により評価を行う場合。「規準」が使われる）、もう一つは、スタンダード準拠評価（数量化が難しい質的な評価が中心の場合。「基準」が使われる）である。現在、[学習指導要領](#)準拠の「絶対評価」による評価は「規準」を用いていることから、実はクライテリオン（達成度など）が前提となっていると考えられる。

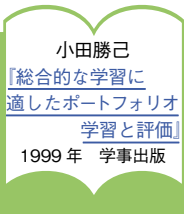
クライテリオンは、量的変量を対象とするため「いつまでに、どこまで理解していれば達成とされるか」をはかる規準が明確になっている必要がある。従って、あらかじめ該当する領域に関する学力の体系をシラバスによって開示しておくことも求められる。

一方、スタンダードは質的な変量を対象とするため、学習活動への関心・意欲・態度なども評価することができるが、ポートフォリオやパフォーマンス、面接などの質的調査を要する。

もっと知りたいときは…



もっと知りたいときは…



ポートフォリオとは、元来「紙挟み・ファイルなど、諸書類などをひとつにまとめておくための道具」のことである。保有証券のすべてやその運用の基礎データを意味する経済的用語としても使われている。

日本では10年ほど前から「学習者の作品やひとままとまりの学習成果の達成及びそこまでのプロセスを記録した学習記録」という意味の教育・学習評価の用語として使い始めた。一般に、ポートフォリオ評価とかポートフォリオ・アセスメントなどと呼ばれる。それまでも、学習記録・各種文集・生活記録などを残すことはあったが、単に学習の備忘録や記録碑的であり、集めて終わりになる傾向があった。対して、ポートフォリオは学習者自身が、保存したのから材料を選択し、価値づけし、記録することによって作成される。そして、授業ではそれらを相互に認め合うなどして、学習の軌跡を振り返り、その評価（意味づけ）を行うことができる。つまり、学習活動を評価の観点で自ら位置づけるとともに、それらを振り返ることでメタ認知力（自らの学習を対象化し捉える力）を高め、より適切な学習活動を営むようにするシステムなのである。学習と評価の一体化を図る上では有効な方法であるといえるだろう。

ポートフォリオ

portfolio [英] 紙挟み 所有有価証券一覧 (転じて学習成果記録 [の評価])

情報ライブラリー

ちょっと
気になる

前から気になっていた、最近よく目にする、そんな「知りたい」カタカナ語をわかりやすく解説。もっと詳しく知るための文献もご紹介します。

平成18年度版
『現代の国語』
『現代の書写』

SNP

サポート・ネットワーク・プログラム

『ことば・こころ・いのち』 直筆ポスター

私たちは、中学生が「ことば」を通して「こころ」や「いのち」を
考えていってほしいと願い、このポスターをつくりました。
『現代の国語』に作品が掲載されている作者・筆者の方々から
寄せられた直筆のメッセージです。

(実物サイズ：天地約60cm×左右約90cm)

いのち

メッセージ

言葉は愛にも暴力にもなる。

三省堂

●国語教科書の作者・筆者より●

言葉は人と人の心をつなぐ大切なもの。だから、もつと読み、もつと書き、もつと聞き、もつと話して、しつこく磨きをかけてやらなきゃ。
内海隆一郎

元気
に
出す
心
出す
考
気



元気とは心と体の調子を整え、
心と体を元気に保つこと。
元気とは心と体の調子を整え、
心と体を元気に保つこと。
元気とは心と体の調子を整え、
心と体を元気に保つこと。

山本 幸次郎
山本 幸次郎
山本 幸次郎
山本 幸次郎
山本 幸次郎

言葉は人と人を繋ぐ大切なもの。だから、もつと読み、もつと書き、もつと聞き、もつと話して、しつこく磨きをかけてやらなきゃ。
内海隆一郎

ことば・こころ


今、あなたに届けたい
こころといのちのメッ

言葉は人と人を繋ぐ大切なもの。だから、もつと読み、もつと書き、もつと聞き、もつと話して、しつこく磨きをかけてやらなきゃ。
内海隆一郎

言葉は人と人を繋ぐ大切なもの。だから、もつと読み、もつと書き、もつと聞き、もつと話して、しつこく磨きをかけてやらなきゃ。
内海隆一郎

言葉は人と人を繋ぐ大切なもの。だから、もつと読み、もつと書き、もつと聞き、もつと話して、しつこく磨きをかけてやらなきゃ。
内海隆一郎

りんごがなると
み、りんご
と、りんご
と、りんご
と、りんご
と、りんご
と、りんご



言葉は人と人を繋ぐ大切なもの。だから、もつと読み、もつと書き、もつと聞き、もつと話して、しつこく磨きをかけてやらなきゃ。
内海隆一郎

[やないただし] 1960年生
まれ。國學院大學哲学科卒
業。元日本教育新聞社記者。



殿様商売

教育ジャーナリスト
矢内忠

東京学芸大学大学院が現職教員向けに二〇〇〇年度開設した夜間開講のサテライト教室(修士課程)で、閑古鳥が鳴いている。初年度、五十人の受講生を集め、都内二か所の教室でスタートしたが、〇四年度は半分以下の二十四人にまで減少していた。データを調べると、減少傾向は皮肉なことに完全学校週五日制と現行学習指導要領が始まった〇二年度から現れ、翌〇三年度の受講者数は実に計四人にまで落ち込んだ。たまりかねた大学側は、〇五年度から交通のアクセスが良くない世田谷教室(同大附属高校内に設置)を閉鎖し、文京区内のもう一つの教室に機能を統合するという。

各種教育改革が矢継ぎ早に進み、教員の資質向上が期待される状況下、学芸大のサテライト大学院は開設された。にもかかわらず、現実には教師を研修の場から遠ざける方向に動いている。

考えられる理由は、まず、小・中学校現場の多忙化。次に、現在の大学の教育学に対する現場教員のニーズが少ないということ。授業料はたいがい個人負担だから、それに見合うだけの内容がないと思われたら、それまでだ。物珍しさが手伝って「初年度効果」が期待できる時期を過ぎれば、大学がよほど努力をしない限り、客脚は自然と遠のく。

サテライト大学院の開設準備に携わった同大の葉養正明教授は、サテライト大学院の「方向性」は間違っていないかったとしながらも、その進め方が必ずしも現実に適合していなかったことを認める。その一方で葉養教授は、問題が単に大学の「殿様商売」の仕方にあつたのではないともみる。

「研修といえば、今の教員は教委の研修センターのことを思い浮かべる人が多い。そして、自分の力で何かを開発していくような職場の文化を、これまで公立学校は育ててきませんでした」

同教授のことばは、単に「負け惜しみ」と切り捨てられない本質的な問題提起をはらんでいるように思えた。

編集後記

●中学生のころ、名画・名作といわれる絵画や美術品をどんなにじっくり見ても、どこがそういわれるゆえんなのか理解できない自分にコンプレックスをもった時期がありました。いつもそこには「正解」があるのだと信じていました。作文を書くときにも、決められた課題にいかに対応するか、正解を探していたように思います。

だれにも必ず起こるはずの、こころの底から感動が沸き上がってくる瞬間を待ちたい。その感情の動きを大事にしてあげたい。

あまん先生、姉崎先生のお話を読んで、そんなことを感じました。

(太郎)

三省堂
三國語教育
101の学び 第9号

二〇〇五年四月三〇日発行

定価 一〇〇円(本体九六円)

編集・発行人 八幡 統厚

〔発行所〕株式会社 三省堂

〒一〇一八三七

東京都千代田区三崎町二二二一四

TEL 〇三(三三三三) 九四二七〔編集

振替 東京 〇〇一六一五四五四三〇〇

〔印刷所〕 泰成印刷株式会社

東京都墨田区両国三一一二

読み語りの
出前 ②



「絵本の新しい楽しみ方を 発見した」お母さん

「ともだちになろうよ」(中川ひろたか・さく
ひろかわさえこ・え アリス館・発行)
264×188 ミリ 32 ページ 1365 円(税込み)



後路好章

[うしろ よしあき] アリス館編集長。選
暦から始めたマウンテンバイクの走行距
離 5000 キロ。「自転車に乗って読み語り
行脚をしたいなあ」とひとりごと。



「ウサギさんになってください」

私の突然の提案に Y 会長は、

「小学校の学芸会で台詞をとちつてか
ら、人前で演じるのは苦手なんです」
と、あとじさりした。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。気楽
におしやべりする調子でやってくれ
ばいいんですから」

絵本『ともだちになろうよ』のウサ
ギの台詞を指差しながら説得した。

長野県松本市の司書の会に呼ばれた
ときの話である。

『ともだちになろうよ』は、「友だち
なんかいらぬ」というワニの男の子
と、「ともだちになろうよ」というウ
サギの女の子のお話。積極果敢なウサ
ギの子に、次第に惹かれていくワニの
子の変わりようがなんとも可愛いのだ。
Y 会長は、四、五十人の司書仲間を
前にして、ウサギ役を堂々と演じ、長
年引きずっていたトラウマを見事に克
服したのだった。

登場人物の会話の良し悪しは、絵本
でもきわめて重要である。

アーノルド・ローベルの「ふたりは
ともだち」の、がまくんとかえるくん
の会話は絶妙だ。が、中川ひろたかの

会話の技はこれに匹敵する。Y 会長が、
すんなりとウサギに変身できたのは、
作者の仕掛けた魔法にかかったのだ。

福岡県の岡垣町でも、この絵本を
使って「ふたりの読み語り」をした。
演題は「絵本と友だちになろう」。教
育委員会の主催で生涯学習の一環とし
て開かれたものだった。

ウサギ役は出席者の中から、目がク
リクリしたお母さんになってもらった。
「うわっ！、おもしろかった！ 絵本
の新しい楽しみ方を発見しました！」

クリクリ母さんは、ウサギの子に
なったままでにつこり。

読み語りの出前は、こんな素敵なお
顔の人たちとも「友だちになれる」か
ら、やめられないのである。



三省堂 国語教育
ことばの学び
第9号 特集 個に応じ、個を生かす学習指導とは

SNP ウェブサイト「ことばと学びの宇宙」

教科書新時代 | Web ガイダンス

開幕! Next Stage へ

1994 年以来 10 年間、多くの方々とともに「対話する教科書」づくりをすすめてまいりました。

さて、このたび新版(平成 18 年度版)教科書の発行にあたり、みなさまとの対話と交流をさらに深めるため、新たに「『現代の国語』『現代の書写』Web ガイダンス」をスタートいたしました。どうぞ、よろしくお願いいたします。

1998

教科書

2002

新ルネサンス宣言



2006

好評連載中

Triangle Column

トライアングルコラム



国語教育人物誌

中渕 正堯

2

2010

ことば・ころも・いのちを考える

— 一家庭と学校のコラボレーションを求めて —

尾木 和英

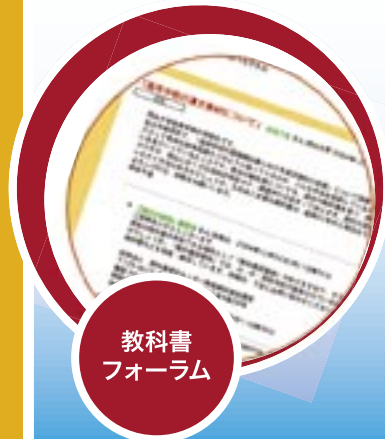
1

ことばと教育の最前線

— 雑誌情報エクストラ —

篠田 信司

3



教科書
フォーラム



『現代の国語』
『現代の書写』
コンセプト



評価についての
考え方と
資料編活用の
アイデア

筆者・作者からの
直筆メッセージ
ポスター



教科書新時代 Webガイダンスは
SNP ウェブサイト「ことばと学びの宇宙」からアクセス
<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/>

テキストから
プログラムへ